

妻と孫を
相棒に

連載

「ジジ」の単独猪猟

神奈川県 田宮 治



地元の狩人達の力を借りて。右が筆者と孫

③ 三つ子の魂、百までも

● 鹿ノ子(カノコ)...

いくら歳をとっていても、朝の三時起きは辛い。それでも、そそくさと身支度を整え出発。現場には六時三十分に着。いつもの木々に犬達を繋いで食事を与える。その間に、三人(私と孫と妻)で軽い朝食にする。天気は、まあまあといったところだが、昨夜のみぞれの跡が木々の枝にあり、それが多少気にかかる。

車から孫が遊ぶ雪ゾリを出してやり、私は犬達を連れていつもの沢沿いの小道を登る。イノシシの掘り跡はあるが、古いものようだ。しばらくすると、「ブル」が何かを起こしたようだが、山を越えて行ってしまった。シカのようなものである。

仕方なく、咬み止め犬の「竜」と「奈智」を連れて、いつもの

コースをグルッと回るように狩り込んだが、イノシシはいない。私は、単独での流し猟が主体なので、自分の勘を頼りの見込み猟となり、その山にイノシシが入っていないければ終わりである。「だめだ、居ないよ」と、車に戻って休んでいると、三〇分ほどで犬達が戻って来たので、次の沢に移動することにした。

今日は土曜日なので、妻と孫には「温泉に泊まるぞ」と最初に話していたので、昼食をとってからでも、もう一ラウンド狩れると思ったので、先ほど狩り残した裏の沢に入ることにした。

車でデコボコ道を、ゆっくりゆっくり跡を見ながら登って行くと、二cmほど積もった雪にクツキリとイノシシの跡があった。「大きいな」と、車から降りて少し跡をつけてみると、この沢の奥に向かっている。

ここは大きな杉林の山だが、これまでに何度も獲物を獲ったことのある沢で、寝屋は切り立った岩上の下草の多い雑木林にある。私が初めてこの山を訪れたとき、昼前に狩ったことがあつた山をその日も狩っていると、地元の犬物グループに沢にマチ

を張られ、イノシシを撃ち獲られた場所でもある。

イノシシが昼前に山を越えれば、必ずこの沢に来ることは、今では当たり前のように知っているが、「初めての山は絶対に越さない」と心に決めていたので、イノシシが山を越えたので、犬の後をつけるつもりだが、車でこの沢に入ろうと沢口まで来ると、道の真ん中に軽トラックが止めてあり、入れなくなっていた。

もし、これが地元の狩人であれば、すべてがわかったうえで「待ち撃ち」で、その日の私は、結果的に勢子をさせられたことになった。しかし、そのようなことは、初めてではなかった。時には「俺の山だ！」とまて言われる。残念だが、こんなとき、都会の狩人はジッと我慢の子でいなくてはならない。何を言われても、何をされてもである。そうすれば、やがて地元のハンターとして顔見知りとなり、存在を認めてくれるものである。

ただ、私が声を大にして言うておきたいことは、「だから、大勢で押しかけず、家族でほん

のちよつと楽しみを分けて欲しい……とお願ひしている」ということである。情けないが、都会には狩りをする山がないからだ。そんな思い出の山に、車で一番奥の車止めまで行き、そこから全犬を放した。小沢伝いに小道を注意深く登って行くが、今日はいつも飛び出すヤマドリも出ない。いつの間にか沢はなくなり、目の前に三〇mほどの切り立った岩の所まで来た。

「奈智」だけが私の少し前にいる。この犬は、強い咬み止め犬で、私の用心棒のような存在である。今日の犬達は、「奈智」のほかに「アニー」「竜」「クマ」「シロ」「ブル」号である。五頭は、先ほどから寝屋のほうに登って行き、姿が見えない。私もやつとのこと、横道をよく登り、岩の上の馬の背中のような小峯に立った。そのときである。突然、「奈智」が急な岩場を滑り落ちるように、下に飛び降りて行った。と同時に、奥から犬達の鳴き声が沸き起こった。「イノシシだ！」と、下を覗き込むが、突き出た岩と大杉で、イノシシの姿は全く見えない。

追い鳴きと、「ドッ・ドッ・ドッ」というような、すごい地響きが一団となつてすぐ下を通り過ぎて行くが、場所が悪く、身動きがとれない。はるか下の小峯を犬達が鳴きながら越えるのが見えたので、「ああ、行ってしまった。あれを越えたのでは駄目だな」と思いながらも、足場の良い場所に移動し、今走り去った沢の隣の沢に立ってみた。

すると、全犬がものすごいスピードで引き返し、私の立っている下を横切るように登って来た。犬達を呼んだが、私を確認しただけで、先ほどイノシシを起こしたと思われる上の沢奥に向かつて、次々に走って行った。「そういえば、ブルと竜がいなかったが……、どうしたのだろう。まだイノシシが残っているのか……」と思ひ直して、見晴らしの良い大岩の上に立った。次の瞬間、前より大きな鳴き声が響き渡った。「止め鳴きだ。まだ残っていたので、戻ったのだ」と思いながら、急いで先ほどの馬の背を登ろうとすると、鳴き声が移動して、今立っている沢の奥に下りて来たようだ。「この沢に追い込んだな。し

めたぞ」と、少し様子を見てみると、止めては下り、また止めては下り、どんだんに下りて来ている。

「この沢は岩場で、深いV字だ。よし絶対だ、もう横には逸れない。必ずあの滝の下に落ちて来る」。急な斜面を何とか一歩一歩、下草につかまりながら横切り、滝が見える七〇mほどの所で銃を握り、「さあ、いつでも来いだ！」と待っていたが、なかなか来ない。

●黒い大猪を撃ち獲る

すぐ滝の上でまた止めている。今度は全犬が付いているようで、山が割れるようにやかましい。こうなると、イノシシは逃れられない。「よし、こちらから行くか」と、さらに近づくと、「ドッ・ドッ・ドッ・ドッ」と、大岩が転げ落ちるように、真っ黒な大きなイノシシが飛び降りて来た。

全犬も、もつれ合つて転げるように飛び出して来た。水のないう滝下はかなり広がっており、その滝の一番奥まった所にイノシシは陣取り、岩を背にしている。「逃がすものか」と、犬達

は半円状で行く手を阻んだ状態であった。

「デカイなあ、早く撃ち獲ってやらないと」と思うが、○六ではイノシシの後ろの岩が気になる。また、犬も近すぎる。イノシシは、まだタテガミをピンと立て、怒り狂っているので、「刺し」はとても無理だ。そろり、そろりと三〇mまで近づきながら、木の横に立った。

「ツアイス」が付いているので、それ以上は近づけない。ここからなら、ライフルの音も問題ない。「落ち着け、落ち着け」の。もう逃げられないのだから」と、自分に言い聞かせながら冷静になると、少し「撃ち下ろし」だが、ほとんど「横撃ち」のようなものだ。

イノシシが突進して出て来て戻るとき、つまり、右足の付け根を斜め後ろから撃てば、その先は岩ではない。私は「よし、よし」と一瞬のチャンスを計っていたが、犬達は益々攻撃を加え、盛んに咬み込んで食い下がっている。イノシシと犬達の「小

競り合い」の状態であった。

「奈智」が鼻先に咬みついた。「ギャン」、次の瞬間、あの「奈

智」が吹っ飛ばされた。すごい突進である。その一瞬、犬達がパツと離れた。「どうだ」とばかり、イノシシが威張って戻った。

「今だノ」私は銃身を木に添えて、一発を静かに撃ち込んだ。イノシシは、崩れるように膝を落とした。全犬が一斉に飛びついて咬みにいく。しばらく見ていたが、やつとわれに返り、「やつたぞ」と、銃を握り締めながら近づいてみたが、イノシシはもう動こうとしない。念のため、銃先で揺すってみたがピクリともしない。

銃を大木の根元に立てかけ、猟刃で止めを刺す。何度やっても、このときが最高の気分である。この感動を一人でも多くの狩人に知ってほしいと思つている。「よしよし、よくやった」と、全犬一頭一頭、名前を呼びながら、抱きしめてやる。

「奈智」は気になったので、一番先に調べると、右の口から耳の下まで裂けていて、ひどい出血だった。クリップで止めようと思つたが、場所が悪いので針で三カ所仮に縫って結んだ。他の犬は、あれほどの激闘にもか

かわらず、致命傷になるような傷はなかった。

傷のある犬には化膿止めを飲ませ、ケガの大きい「奈智」と「竜」と「シロ」を引き、ひとまず車に戻った。他の三頭は木に縛っておいた。車が見える所まで戻ると、孫と妻が待ちかねたように「獲れた?」と言つて近づいて来たが、「奈智」のケガを見て驚き、車に引き返して後部ドアを開けてくれた。

幸い「奈智」の血も止まりかけていたので、急いで車に乗せて休ませた。「大丈夫、奈智は強い犬だ。ちゃんと自分で歩いて来たんだよ」と説明し、孫と妻を安心させた。

「ほかの犬達は、みな大したことはない」と言うのと、やつと笑顔になった。

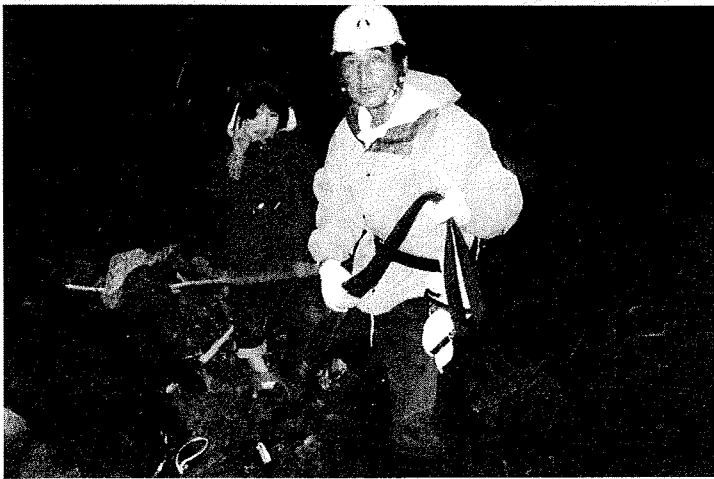
そして、私は大猪を獲ったことを伝えた。孫

と妻は驚いて、それでも「やった、やった」と大声で喜んでくれた。

車から引き綱とロープ、それにドリントクを三本持つて、再びイノシシの所に戻ると、「ブル」と「アニー」の綱が緩み、二頭は大猪に乗って毛をむしり取っていた。そんな「アニー」達は何度も頭を撫でながら「よしよし、よくやった」と褒めてやった。そしてもう一度、三頭を引



そのとき、1発で止めた130kgの大猪



大猪に驚く孫の「朱里」ちゃん

いて車まで戻った。
三回目に小木や下草を切り払って、道を作りながらイノシシの所に戻ったときは、四時になるうとしていた。

さて、ここからが単独猟の泣き所で、地獄の引き下ろしが待っている。一〜二m引いては足場を確認し、また一〜二m引く……この繰り返しである。幸いに、ここからだ全部が下りで、大滝は一カ所だけで、しかも横道まで水は全くない。それに雪が

滑ってちようどよい。

しかし、横道が崩れていて、三〇mほどはロープを張って引き出さなければならぬ。どう頑張っても今日中には引き出せないが、何とか途中まででもと思ひ、一人で一三〇kgのイノシシを転びながらも、大汗をかきながら引っぱり続けた。

孫と妻が心配して小道のある杉林の外れの、小さな滝のある所まで迎えに来てくれたが、イノシシの大きさに驚いて、「パパ、今までで一番大きいね」と言つて喜んでくれた。カメラを持って来てくれたので、写真を撮ることにしたが、辺りはもう薄暗くなつていた。

孫は「ジジ、気持ち悪いよ」と、暗くなつて見る大猪にただ驚いている様子だった。「わかつた、わかつたよ。今日はここまで。さあ温泉に行こう」と、孫の手を引いて車に戻り、急いで今夜の宿へと向かった。

この夜は、特別にうれしく、楽しい夜だった。妻と酌み交わすビールもピッチが進み、あつと言う間に何本も空き瓶が並んだ。夕食も何とも言えない味であつた。思わず一句出た。

◎獲れずよし、獲れてなおよし
山宿の 大猪こえるか
孫の笑顔

翌朝、イノシシを置いてきた現場に行くと、岩の上にまた岩が乗っているように、獲物は何事もなく私を待っていた。今日は、銃も犬達も車の中で、ただイノシシを引き出すことに全力である。五〇〇mほどの引き出しだが、道の崩れた所にロープを張り、滑車で引いたり悪戦苦闘を繰り返す。そして、三時間もかかつて、やつとのことで車に横付けした。



温泉にて妻と孫

振り返つて考えても、これぞ単独猟で、寝屋の特定から行動の判断まで一人で行う。特に行動の判断を誤れば、猟果につながらないことは言うまでもなく、即、犬がケガをしたり、最悪の場合には命まで落としかねないことを決して忘れてはならない。
単独猟の場合は、常に落ち着いた冷静な判断と、何事も一人で成し遂げる……という強い信念と実行力が必要である。
それにしても、昨日の犬達の働きは実に素晴らしかった。寝屋から一直線の谷落としてあつた。絡み止め、イノシシが逃走



犬達が咬み、毛が抜けてしまった大猪

すると食い下がって咬み止める。そして、谷でガッチリ止めて私に撃たせてくれた。大猪との攻防も絶妙で、咬み込みも申し分ない。実に気持ちの良い切れ味で、見ていて全く飽きることはない芸風になってきた。うれしかぎりである。

●狩猟歴四五年で得たもの

色々なことがあった。とても言葉で言い尽くせる道程ではない。六七歳になっても、いつも頭に浮かんでくることは、大猪を獲ったことでも、シカを射止

めたことでもない。

私が生まれたのは、新潟の山村である。私はその村での「ウサギ猟」と「ヤマドリ猟」のことをいつも思い出す。当時は、今のように遊ぶ道具も場所もなかった。小さな男の子の遊びと言えば、川で魚を捕ったり、山で小鳥を捕ってきて飼うとか、秋になればアケビやクリ拾い：だった。吉幾三の歌を地で行くような山村で、自慢できるのは自然だけであった。

「俺は、こんな村はイヤだ。東京に出てベコ(牛)を飼うんだ」ではないが、私は東京に出て犬を飼っている。本当に、シヤレにもならない。

そんなわけで、この村での狩猟といえば、ウサギとヤマドリ猟であった。この村には、イノシシ、シカ、それにキジもいなかったが、当時はヤマドリとウサギは多かった。どの沢に行っても群鳥、群鳥であった。ウサギも家の周りまで出て来た。また、山に行けば、雪の上にその足跡を付けていた。

家の広間は、天井からヤマドリが何十羽も吊るされ、またウサギは外の作業小屋に吊るして

あった。私は、小学校三年生の頃から父や兄達について行くようになって、自然と狩猟を覚えていった。

私は特に犬が好きで、どこに行くのも一緒であった。その犬は、ウサギやタヌキ、ヤマドリ等々、何でもこなすとても利口な犬だった。ヤマドリ猟は、沢を狩るのが主であるが、私がいづも思い出すのは「待ち撃ち」、つまりヤマドリを小屋で待つて撃つ猟のことである。

この猟は、秋の刈り取った稲穂を干すハサ木に出てくる：ところから始まり、アズキ畑やソバ畑に付く猟、そして雪が深くなって、犬での沢猟が思うようにならなくなると、最後のウルシの実に来るヤマドリの「待ち猟」へと移って行く。

ウルシの木をよく見える所に雪を掘って、杉の葉と椿の葉で小屋を作り、朝と夕方通うのである。朝まだ暗いうちに、前日の足跡を頼りに、三〇分から、時には一時間もかけて小屋にたどり着く。明るくなる三〇分くらいが勝負の猟である。

私の役目は、決まって犬を小屋の隅で抱きしめ、飛び出さな

いようにすることだった。実は、これがなかなか大変な役で、時々犬を逃がしてしまい、兄に怒られた。

だんだん明るくなると足は痺れ、雪の中なので座っている尻の辺りから寒さがジワッと伝わり、たまたらなくなる。突然、雄の羽ばたく音が静けさを突き破る。「ゴドツ・ゴドツ・ゴドツ」あつちでもこつちでも始まり、眠気が吹っ飛ぶ。犬もキツと耳を立て、飛び出そうとする。

「待て、まて、まて：」ささやくように抱きしめて鎮める。しばらくすると、棒切れでも勢いよく投げたような「ビュー」という唸り声とともに、「バタ・バタ」と音を立て、ウルシの木の下の雪に着地する。そして、また静まり返る。

このときが一番大切な瞬間で、少しでも動いたり音を立てたりしては駄目である。身動きせず、息さえ殺してジッと辛抱だ。ヤマドリは、外敵がいないと安心して、バタバタと木の枝に上がる。そして、「クツ・クツクツ」と鳴きながらウルシの実を食べ始める。

それを合図のように、「ヒューバタバタ、ヒューバタバタ」と、次々に飛んで来る。中には、直接木に止まる鳥もいる。このように、全鳥が木の実を食べるようになったときでない、決して撃つてはいけない。

もしもその前に少しでも動くものなら、「クウーツ・クウーツ・クウーツ」と、先ほどの機嫌のよいときの短い声とは全く別の、長く高い声を発し、あつと言う間に飛び降りて、藪に走り去るのである。この間、犬が「ワン」とでも鳴いたらおしまいである。

やがて、兄の撃つすごい音がして、ヤマドリが雪の中に落下し、長い尾だけが雪から出ている。見事、成功のときである。一発で、悪あがきせずにヤマドリが落ちると、銃の音は平気なので、続けて二羽、三羽と落とせるときもあるが、大抵は二羽が限度である。当時の銃は、ケースが抜けず、二連でも二発が限度だからである。

それまで静かにしていた犬も、銃声がするともう駄目で、暴れて外に飛び出す。走り去ったヤマドリが犬に追われ、また獲れ

ることもあるのだが、実に楽しい猟だった。

犬を連れて行くのは、それから昼過ぎ頃まで、おにぎり一つで沢のヤマドリやウサギを狩るため、この地方は雪が多い所なので、犬での猟はよほど運が良くなければ猟果がない。そうなる「私」が犬の代わりにするのである。

冬休みともなると、毎日ウサギの「巻き狩り」である。兄弟で、来る日も来る日も握り飯を背負って出かけたものである。この地方では、十二月に雪が降ると、クマも人が追って獲るのであるが、これらを通して私は、イノシシもクマも、シカでさえウサギと同じ逃げ道である。ことを知ったのである。

要するに、獣達は暗い所伝いに楽な峰を越すのである。今もって、私が銃を撃つのも「マチ」を張るのも、また犬をかけるのも、すべてこの頃に覚えたウサギが基本になっている。

「三つ子の魂、百までも」楽しいとき、苦しいとき、いつも思い出す遠い日の思い出である。(つづく)

東京で一番西にあるハムショップ <http://www.cqjapan.com>

YAESU FT-8800R **NEW**
★ワイドバンドバージョン★
50/35W



144/430MHz VV/UU同時受信ができます。
日本語取説有り。逆輸入タイプ
TEL特価 お問い合わせください。

ALINCO DR-620H
★ワイドバンドバージョン★
50/35W



144/430MHz VV/UU同時受信ができ、
使い易いおすすめ品です。
特価 44,900円

ALINCO DR-120H
★ワイドバンドバージョン★
50W



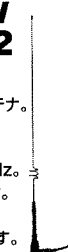
144MHz
使い易いシンプルタイプ。逆輸入タイプ。
特価 30,000円

NATEC PL-500
犬用小型発信機




送料サービス
特価 29,000円
その他NATEC製品各種取り扱っております。お問い合わせください。

Maldol FA-502
おすすめマグネットアンテナ。



144/430MHz。
ケーブル4m付。
M型/BNC型
2タイプあります。
特価 4,900円

Maldol MY-144E2F
おすすめ八木アンテナ。



144/430MHz。BNCタイプ。ケーブル1m付。
特価 10,900円

【同軸変換ケーブル】
○MJ-BNCP(2D1m).....1,800円
○MJ-SMAP(2D1m).....1,800円
○BNCJ-SMAP(2D1m).....1,800円

ALINCO DJ-193
★ワイドバンドバージョン★
5W



144MHz。使い易いシンプルタイプ。
バッテリー、充電器付。
逆輸入タイプ。
特価 19,800円

KENWOOD TH-K2AT
★ワイドバンドバージョン★
5W



144MHz。使い易いシンプルタイプ。
バッテリー、充電器付。
逆輸入タイプ。
TEL特価 お問い合わせください。

【変換コネクタ】
○MJ-BNCP.....700円
○MJ-SMAP.....1,000円
○BNCJ-SMAP.....1,000円

★好評!全国通信販売。便利な代金引換(代引)にて即日発送致します。※掲載されている商品は全て税込価格です。

業務用無線・アマチュア無線専門店
多摩電機

★午後5時頃までのご注文は、当日発送も可。
〒198-0036 東京都青梅市河辺町4-19-3
TEL:0428-23-1509(代) FAX:0428-23-1581
営業時間:09:30~19:00 木曜定休 tamadenki@cqjapan.com